

Research Note

関西学院大学地域・まち・環境総合政策研究センター研究報告 (11)

Research Note of Region, Town, and
Environment Policy Studies Center (11)関根 孝道¹・益田 博²

Takamichi Sekine and Hiroshi Masuda

第1 はじめに

本稿で千刈レポートも五作目を数える。タイトルは「千刈キャンプにおけるオリエンテーションプログラム～社会学部新入生キャンプをサポートして」である。今回も益田の手による現場からの実践報告である。ここでは2012年の5月に実施された社会学部の試みが紹介されている。とくに「社会学部」という部分を強調したい。というのも、上ヶ原にある学部が千刈キャンプを利用すること自体が希有なことだからである。上ヶ原キャンパスと比較すると、三田キャンパスと千刈キャンプの結びつきは、深い。千刈キャンプを利用した新入生向けのゼミ合宿が、学部予算化され、多くの担当教員によって実施されている。三田キャンパスの学生には馴染みのある千刈キャンプだが、上ヶ原の学生にとっては「はるか彼方の縁遠い存在」でしかない。益田は「上ヶ原や聖和キャンパスでは名前すら知らない学生が多い」と嘆く。千刈キャンプを訪ねたことがなければ、その価値も理解できるはずがない。「関学には、『千刈校地』があって、そこは『関学の森』といって、『自然体験学習』ができるし、『すごく楽しい』んだよ」。このことが当たり前のように語られるのはいつの日だろうか。

本稿で益田は社会学部が実施した学習プログ

ラムとその成果を紹介している。前回の報告は「千刈キャンプの学外利用の可能性～自然観察指導員の養成現場として」であった。その中で益田は、千刈キャンプが学外のプロの研修トレーニング場としても利活用でき、自然環境の目利きからも高い評価を受けたことを指摘している。このようなお宝施設を学内「全体」でフル活用しない手はない。そのための今後の課題—たとえば、「千刈プログラムメニュー」の充実、など—も本稿で示唆されている。益田によると、キャンプには千刈「裏」メニュー—これが何であるかは、本稿を読んでものお楽しみ—があり、学生は自由時間にこの裏メニューで盛り上がっているという。この点に共感する教員は私だけではないだろう。「学生には学生なりの楽しみ方がある」というのは、学生を引率してキャンプ・インした教員は誰しも実感していると思う。この「楽しみ」を体験しないまま卒業する学生は気の毒に感じる。その責任の一端はキャンプを有効利用しない教員にもあるのだろうか。

今回ののはしがきも「ダサイ」千刈利用のPRとなってしまった。一人でも多くの教職員の千刈利用を願いたい。宝の持ち腐れとしないために。

1 関西学院大学地域・まち・環境総合政策研究センター長。

2 関西学院千刈キャンプ事務長補佐。本学部総合政策研究科前期課程修了生。

第2 千刈キャンプにおけるオリエンテーションプログラム ～社会学部新入生歓迎キャンプをサポートして～

千刈キャンプ 益田博

はじめに

学内施設のさらなる有効利用を進める上で、千刈キャンプを始めとした千刈校地はもっと注目されるべき資源であると常々考えている。もちろんそれは、職員として現地に駐在しているのであるから当然なのだが、リトリートや野外レクリエーション、学生交流の場としてだけでなく、様々な教育の場を提供していける可能性がここには眠っている。エネルギー・環境・災害支援など、世界市民として地球規模で活躍する人材を育てる場としても、非常に有用な施設なのだ。

三田キャンパスにとっては千刈キャンプでオリエンテーション合宿を行うことは珍しいことではなく、多くの学生が1度は泊まったことがある施設となっている。しかし上ヶ原や聖和キャンパスでは名前すら知らない学生も多い。アクセスなどが良くない(乗り換えが必要で交通費が高い)、ルールが堅苦しいなどの理由で、一部を除いては、教員にとっても身近な研修施設になっていない。

このような状況のもと、本稿で取り上げる「社会学部新入生歓迎キャンプ」は、組織された学生リーダーを企画運営の中心において、学部教職員がサポートする形で行われた。つまり、キャンプという場を活用したキャンパスコミュニティづくりの事例でもある。

千刈キャンプの視点からは、西宮市内のキャンパス内での当施設に対する認知度の向上という観点からも重要な取り組みであったと考える。簡単な報告ではあるが、本稿を通じて、千刈キャンプのさらなる利活用を関西学院大学全体で考える一つのきっかけになれば幸いである。



写真1 参加者全員で

キャンププログラムの概要

とき 2012年5月11日(金)～5月12日(土)

1泊2日

目的 新入生の交流

学生交流プロジェクト(学生組織)の存在をアピールすること

参加者数 学生74人(1年生48人、上級生26人)、
教職員9人

2日間の流れ

時間	スケジュール	場所
1日目		
18:30	大学正門集合	
20:00	千刈キャンプ到着	
	夕食	食堂
20:30	キャンプ開始式、オリエンテーション	食堂
21:30	キャビンへ移動	
	入浴	センター棟
22:30	消灯	
2日目		
7:00	起床	
7:30	朝食	食堂
8:15	キャンプデューティー(掃除)	
9:00	親睦会(交流ゲーム)	センター棟前
10:00	野外自炊	ボールサイト
13:00	オリエンテーリング(千刈ラリー)	場内全体 スタート:ボールサイト ゴール:コロシウム
15:00	キャンプのふり振り返り	辻記念チャペル
16:00	閉会式	辻記念チャペル
16:30	千刈キャンプ出発	
18:00	JR三田駅経由・大学正門到着、解散	

○参加学生などの感想から2日間を振り返る

まず初日について。授業終了後に上ヶ原を出発したので、キャンプ到着後は夕食に続いての全体的なオリエンテーションを終えると入浴、キャンピング入りとなり、プログラムらしいことはほとんど出来なかった。しかし、キャンピングの中で遅くまで話していたようなので、ウラのプログラムは十分に行われたようでもある。こういったスキマの時間でこそ真の意味での交流が進むのであろう。考えようによっては、自由時間(ウラのプログラム)のために、公式のプログラムがあるとも言える。自由な時間と活動の時間のバランスの見極めがなかなか難しい。



写真2 食堂で開会式

2日目のメインプログラムはグループ別の活動として、野外炊事と場内を使ったオリエンタリング形式の課題解決ハイク「千刈ラリー」を行った。

やはりアウトドアの料理というのはわかりやすく純粋に楽しいので学生たちの印象も良い。炊いたご飯をオーダーする団体が最近の千刈キャンプでは多くなっているのに対し、今回は生米を炊くことにも挑戦した。失敗するとこげたご飯となるので本気にならざるを得ないが、そのことで役割が増えるなど、かえって盛り上がったようだ。また、教職員も同じように料理

をしていたので、普段は教壇や事務室のカウンターの向こう側にいる大人たちとの新たな交流や発見の場となったようだ。



写真3 ご飯もきれいに炊けた!



写真4 カレー作り

また、グループごとに場内広く設置されたポストを探し歩き、ポストごとの課題を解く千刈ラリーもグループで知恵や力を合わせる場となり、自然と交流が進んでいったようだ。このラリーは、対象に応じた課題を設定することで、仲間づくりだけでなく課題解決能力やチームワークなど高める実践形式のトレーニングとして活用することができる。



写真5 チームワークでクイズにも挑戦



写真7 全員でふり返りと分かち合い



写真6 ラリーのゴールでドッジボール大会

キャンプ最終のプログラムとなった全体でのふり返りと分かち合いの時間では、最も良かったこととして「新しい出会いがあった」や「友達が出来た」ことをあげたが学生がほとんどであった。

1泊のキャンプであったし、短い時間で全員の感想を求めた中でのコメントであったので、深い言葉はもちろん期待できなかったが、たとえ一泊二日のキャンプであっても、大学生活のスタートの段階で多くの人と知り合えるという機会に対し、みな高く評価していたといえる。

社会学部事務室も、「都会育ちが多く、千刈の大自然の中で思い切り遊べたこと良かった」「何よりも学生同士の仲を深められた」として、当初の目的は達成できたと評価している。また学生スタッフたちの交流が進み、同時に彼ら彼女らも企画から実施までを体験することで成長したようである。上級生をうまく巻き込むことで、「よこ(同級生)」だけでなく「たて(先輩後輩)」のつながりもできる。さらには、学部事務室の全面的なバックアップを通していわば「ななめ」の関係ができ、こういったオール学部体制で新入生を支えるネットワークとなったといえよう。



写真8 教職員も混じって卓球大会

○千刈キャンプにとって今回のプログラムは他の一般的な青少年施設同様に、千刈キャンプでは特に春学期にはオリエンテーション合宿と

いう使われ方が多い。今回の社会学部新入生歓迎キャンプも千刈らしい使われ方である。千刈キャンプとしては、目的にかなう場として上ヶ原キャンパスの学部から選ばれたことに大きな意味があった。

西宮のキャンパスにいと千刈キャンプはかなり遠いのが一般的なイメージだ。大学生活のスタート時にこの森で思い出に残る時間を過ごしたことや、そんな機会を自分たちの手で作り上げたことは、千刈キャンプの認知度向上に少なからずつながったはずだ。

むすびにかえて 今後の課題は

1. 提案力

初めての試みともなった社会学部サイドからの求めもあり、千刈キャンプとしてキャンププログラムの立案段階から学部内のスタッフミーティングにも積極的に出席し、千刈キャンプの概要説明からプログラムの提案や調整、そして一つのプログラムを実際に担当し進行に関わった。



写真9 交流ゲーム(背中中は筆者)

こういったいわば出張サービスは、小グループの単なる野外レクリエーションのためのキャンプであれば、おそらく不要であろう。しかし、学部や学科単位といった規模や、準備から実施までの運営方法、目指す目的などによっては、施設側

としての千刈キャンプがスケジュール調整などのルーチン的なサービスを越えた関わりが必要となると考えている。もちろん、今でも求められれば何処へでも出かけていく体制にはある。プログラムのサンプル体験であっても可能だ。

とはいうものの、現在の千刈キャンプでは、指導系業務を担当できる専従スタッフが専任事務職員1人となっているので、長時間にわたりプログラムを担当するのは難しい。現場の責任者として、様々なデスクワークや応対など事務室を離れられない場面も多く、またそのような場面は土日が多くなっているためである。しかし、千刈キャンプの質向上のためには、不可欠なサービスであると思っている。

2. プログラムのパッケージ化

実施後のフィードバックの中に「朝食後に実施した交流ゲームだけではなく、チームビルディングやプレゼンテーション力の向上プログラムなど、千刈プログラムメニューがもう少し充実していれば、他の機会でも千刈をどんどん活用していけると感じました」というコメントも寄せられた。千刈に在るものとして感じていることでもあったが、このあたりにも学生を育てる上でこの場に求められているニーズはまだ隠れている。



写真10 じゃんけんゲームでウォーミングアップ



写真11 『セーの』でスタンドアップ

アウトドアを使ったリーダーシップやコミュニケーションのトレーニングの素材はすでに千刈にある。パーツはあるのだが、ニーズに応じた製品化は十分ではなく、そして、そして売っていく仕組みはほとんどない。守りつつ攻めるというのは簡単ではないが、一つずつ課題に取り組むしかないだろう。

また、にぎやかに楽しく交流するというだけでなく、ゆったりと、静かに、という時間も千刈らしい過ごし方である。本稿のようなオリエンテーションプログラムとなると、時間の制約や効率の面から、できるだけ人数を固め1度にまとめて、ということになりがちになる。しかし、少人数の良さを生かし、街の喧騒から離れ人と自然とゆっくり深く触れ合う時間の提供というのも、千刈らしいといえよう。レストランに例えると大人数向けのビュッフェと人数限定特別ディナーの両方が出来る教育施設というのが理想だ。

3. 大学として千刈をより活用する姿勢

これまでも繰り返し述べてきていることであるが、千刈キャンプの課題の一つは、存在そのものを知られていないことである。

今回のキャンププログラムをどこで知ったのかというアンケートの問いに対して、最も多い答えが「キリスト教学」であった(46人中38人、約83%)。以下、「掲示・チラシ」が7人(約16%)、友

人が1人となっていた。

社会学部宗教主事・千刈キャンプ副所長でもある打樋啓史教授が今回のキャンプのオーガナイザーで、特に1年生に対して最も近いチャンネルを持っていたことが反映されているのであろう。

こういったことから、大学教員の千刈キャンプに対する認知度が学内の利用促進の重要な要素となっていることが分かる。

施設の活性化への現場が努力することは当然であるが、大学全体として利用促進につながるバックアップが望まれる。

以上